



フランス文学研究室 NEWS

平成 26 年 3 月 17 日
第 2 号

この号の内容

- 1 イベント報告
- 2 在学生数
- 3 卒業生進路
- 4 学部生の声
- 5 就職活動記
- 6 海外体験記
- 7 留学生だより
- 8 卒業論文あとがき
- 9 学会旅行記
- 10 編集後記
- 11 ホームページ紹介

今年度も「研究室ニュース」をみなさまにお届けできることをうれしく思います。昨年度の創刊号につづきこうして第 2 号の発行を迎えることができたのも、学生ひとりひとりの努力はもちろんのこと、スタッフや当研究室に関わるすべての方々のご尽力の賜物です。今後も学生主導によるこの新聞が継続して発行できるよう、研究室一同励んで参りたいと存じます。

(博士後期課程学生・研究助手 白石冬人)

イベント報告

2014 年 1 月 23 日 ルウェリン＝ブラウン先生(サンジェルマン・アンレー国際高校)講演会
「破壊せよ」：マルグリット・デュラスの作品制作における争点

2013 年 11 月 21 日 ベネディクト・ゴリヨ先生(ヴァランシエンヌ大学準教授)講演会
「フランス現代詩地図の素描—フランシス・ポンジュの多様な遺産—」

2013 年 10 月 29 日 ナタリー・コーブル先生(パリ高等師範学校准教授)講演会
「バレンタインの詩—ある詩的伝統の発明—」

在学生数

博士後期課程 4 名
博士前期課程 3 名

学部 4 年 19 名
学部 3 年 7 名
学部 2 年 2 名
受入れ留学生 2 名

平成 25 年度卒業生進路

就職

秋田銀行
グラクソ・スミスクライン
警視庁
こころネットグループ
仙台国税局
仙台清掃公社

豊田通商

長野県庁

白洋舎

進学

東京大学博士前期課程 1 名

東北大学博士前期課程 1 名

早稲田大学博士前期課程 1 名

学部生の声 フランス文学研究室への転専修にあたって

「めくるめく」という言葉の意味を勘違いしていたことに、つい最近になって気づいた。めくるめく体験といえば、本のページをめくり、1 ページごとに、世界が万華鏡のごとく変化するのを夢中で味わうような体験、「めくる体験」だと思っていたのだ。「めくるめくる」の反復はやや冗長だから、最後の「る」だけ欠落した、という自分なりの理屈さえどこかにあった。あるきっかけで広辞苑を引いたとき、「目眩めく」と見つけて唖然としてしまった。

この間は不思議な夢を見た。ある本のプロローグと 192 ページに用事があったのだが、本は迷宮となっており、私もその中にいた。そして、読むためには、迷宮のプロローグの部屋と 192 ページの部屋を、自分の足で訪れる必要があった。

このようなことがあると、私には本をめくることも、世界を歩くことも同じなのかもしれない、と思ったりする。私は英文学研究室にいたのだが、研究室を移動し、去年の 9 月から仏文学研究室に所属している。元々、アルファベットの辞書を繰るのが好きだった。高校までは外国語イコール英語だったし、ほぼ盲目的に英文科に入ったが、ただ繰るだけではだめだと気づいた。肝心の読み取るべき内容はというと、英文学よりもフランス文学の方が興味深く感じた。そして転専修に至った。

初めて仏文研究室に顔を出したのは、去年、読書会に参加しようと、緊張しながら資料をもらいに行ったときだった。それ以降、仏文の行事に時々参加した。読書会のアナウンスも、研究会の発表資料もみな、フォントは MS 明朝で句読点は「、」「。」であった。この『フランス文学研究室 NEWS』もそうだ。英文科の授業で同級生が使うのは「、」「。」で、またフォントも各自のものだった。今回の寄稿にあたり、初めて仏文の書式で書いてみている。これで私も仏文という感じと、形から入って背伸びだけしている感覚の両方がある。この体裁で書かれたものは、先輩方や同級生の優れた資料、文章だ。私は肩を並べられるのだろうか。

研究室所属と同時に留学することになったフランスで、いまは多くのことを学んでいる最中である。

(学部 3 年 玉田優花子)

就職活動記

2012年8月。私の就職活動は撃沈から始まりました。フランスへの交換留学終了後、「とりあえず」という軽い気持ちで臨んだ経団連主催セミナー。そんな甘さが、全ての原因でした。自分がやってきたことも、将来やりたいことも、何も言えずに終わったことを覚えています。留学前の予定通り留年を選択し、1つ下の後輩達と再スタートしたのは、撃沈から僅か2ヶ月後でした。

その一度の撃沈によって、2012年12月から始まった就職活動は、2ヶ月前のそれとは明らか何かが違いました。「自分のやりたいことは何か」、「自分はどんな人間になりたいのか」等の自問自答を繰り返し続けたことで、自分の志や将来像が明確になったのです。例えば現在抱いている志は、「日本のよいものを、もっと世界に広める」ことです。留学生活と、パリで開催されたジャパン・エキスポで通訳のアルバイトを経験したことにより、そのような思いを抱くに至りました。この志は、私自身が社会人となる意義と合致しているのです。志が明確になったことで働くことへの目的意識が明確になり、「とりあえず」という甘い考えは消え去ったのです。自信を持って企業の方々とお話できましたし、多くのご縁を得ることもできました。

就職先として選んだ豊田通商は日本に7社ある総合商社の一翼です。世界を見渡しても、総合商社ほど多岐にわたる商材と広範な関係先を持つ例はありません。古くから日本の輸出入を支え、現在はトレーディングと事業投資という二軸を持っていましたが、ただ商品を流すだけの時代は終わり、常に方方にアンテナを張ってシーンを問わずに活躍しなければなりません。

アフリカ大陸との関係が深いフランス大手商社CFAOを買収した豊田通商においても同様のことが言えます。長年支援を受けてきたアフリカは、まずはBOPビジネスを端初とし、世界経済への影響力を強めるでしょう。リスクもありますし、挑戦し続けなければならないタフな状況です。ですが、日本の誇るよいものを適正に届けられれば、それは日本にもアフリカにも好影響があることは疑う余地がありません。その架け橋となることは、同時に私の「日本のよいものを、もっと世界に広める」という志とも結びつきます。字数の都合上割愛しますが、将来像とも共鳴した企業でもあります。

色々書いたものの、私は未だに社会には出ていません。2014年4月、私の社会人生活は始まります。打ち立てた志や生き方を貫けるか否かが、今試されます。就職活動をゴールとせず、これからも勇猛邁進する所存です。

(学部4年 関本佑太郎)

～のんたんの名言どうでしょう？～

Le temps atténue le chagrin. 時が悲しみを和らげてくれる。

時に悲しみは私たちの胸をしめつけ、息を詰ませ、思考を停止させる。心に大きな穴がぼっかりと空いてしまう。でも人は悲劇を悲劇的に生きない。未来は人を否が応にも前進させ、私たちの目にうつるあの悲しみは少しずつ形を変える。先のことは誰にもわからないのだから、悲しい時は誰かの腕の中にいるように、時の流れに身をまかせればよい。

出典：ロワイヤル仏和中辞典 解説：学部4年 丹野宗文

Les Fourberies de Scapin (スカパンの悪だくみ)



海外体験記 海外ボランティアの思わぬ影響

大学3年生になる3月に、友人に誘われて10日間の海外ボランティアに参加した。内容は、震災の体験を海外の学生に伝えるというもので、わたしのチームの派遣先はベトナムになった。大使館訪問や、大学での発表、途中2日間のホームステイもあったりと盛りだくさんの内容だった。現地の学生と一緒に七夕飾りをつくったり YOSAKOI を披露したりと、日本の文化も伝えてきた。途中、ホームステイ先の子との意思の疎通に悩んだり、屋台の snacks を食べてお腹を壊して予備の薬を飲み切ってしまうというピンチに襲われたり、とにかく驚くことがたくさんあったが、その分充実した旅となった。

ベトナムという国で受けた衝撃があまりにも大きすぎて、帰ってきてしばらくは日本での日常生活がぼやけて見えた。自分のこれからについてぼんやり考える日々が続いた。ベトナムでの現地学生との交流や発表の機会を通して「伝える」ということに強い興味を抱いてはいた。ようやくピントがあった時、わたしの心に「アナウンサーになりたい！」という夢が芽生えていた。思い立ったが吉日と、それから慌ただしくアナウンサーになるための準備を始めた。申し込みギリギリでアナウンサースクールに滑り込み入学し、歯並びが悪かったので歯の矯正治療も本格的に始めた。

自分がこんな風になるとは思ってもみなかった。長年、主婦になるのが1番の夢だったからである。人生とは予想外の連続だ。でもきっと、アナウンサーになっても幸せな家庭を築くことはできるはず。海外ボランティアがきっかけとなった思いがけない夢を大切に、実現に向けて日々頑張っていきたい。

(学部3年 岩崎ちまき)

留学生だより (フランス・レンヌ大学)

こちらへ来て、はや半年が経とうとしています。今年はまだ雪を見ていません。足の甲が出たトゥシューズを履いて散歩しています。まだ秋にいるような心地ですが、もう2月になるのですね。耳にしていたとおり、諸手続は煩雑で何度となくやきもきし、そして勉強にはかなり手を焼いています。これはもう覚悟の上だったのですが、思いがけない壁がありました。”bisou”です。

会ったときや別れるときに頬を合わせる、このフランス式の挨拶。何の変哲もない日常風景の一コマであり、誰もが当たり前になす習慣なのですが、もともと人見知りの気がある私は当初抵抗を覚えました。日本においては、50センチ以内に顔を寄せることなど(親密な間柄を除けば)まず無いですよ。心理学的にも、この距離に違和感を覚えないのはごく一握りの心を許した相手だけなののだとか。フランス人は根が開放的なのでしょうか。私にとってこの近さはもはや、怖い。その上この仕草、簡単なようで意外と難しく、最初の頃は戸惑うことばかりでした。



▲ レンヌの土曜日。フランスで2番目の規模なのだとか。果物、野菜、魚、お肉、お花・・・と何でも売っています！



▲ ライトアップされたレンヌのオペラ座。ノエルの時期は町中がライトアップされとても綺麗です。

※タイトル写真補足

ノルマンディ地方の観光名所、モン・サン＝ミッシェル。レンヌからはバスで1時間ほど。世界中から観光客が訪れます。

基本的には右頬、左頬と2回なのですが(私のいるブルターニュでは稀に右左右左で4回の人もあり、南仏では3回の場合もあるのだとか)、どちらの頬を出すのか迷ってぎこちなくなったり。あまりに強い香水にくらくらしたり。ひげがじょりじょりと擦れて痛かったり。これでもか、と屈んでくれる相手に申し訳なくなったり。口で軽く音を立てるのも難しいものです。しかもその合間合間に Salut!・Asuka・Enchantée! と挨拶や自己紹介まで挟むのですから尚更です。しかし一度慣れると、この“bisou”，すごいのです。たった数秒で、相手の声、名前、匂い、身長・・・等々を実感として感じ、自然と相手を心の中にずっと受け入れてしまうような挨拶、今までしたことがありませんでした。初めまして、よろしくお願ひします、と頭を下げ、ぎこちなく愛想笑いをしながら次の話題を探す“初対面”はいつも怖いものだったのですが、こちらに来てだんだんと“人”に対する緊張や警戒がほぐれていくのを感じています。

留学先では、当然ながら全く異なる文化に身をゆだねて生活することになり、それはとりもなおさず、些細な日常に途方もない発見がちりばめられ、今までの自分を見直すきっかけに出会えるということなのかもしれません。この環境に感謝しつつ、帰国する頃にはひとまわり大きくなっていたらな・・・と考える留学の折り返し地点です。(学部4年 武政明日香)

卒業論文あとがき

みなさんこんにちは。学部4年の菅美咲です。卒業論文執筆を通して感じたこと、ということだと思ったことをつらつらと書いてみます。私はユゴーの『レ・ミゼラブル』について卒論を書きました。1年生のときに授業で読んだのがきっかけで、フランス革命周辺の話が好きだったり、ロマン主義的な筋書きが性に合っていたりしたこともあり、この作品を選びました。ちょうど2012年に映画化され、ミーハーだと思われたらいやだな・・・と思ったのはここだけの話です(笑) 卒論の作成は6月の構想発表のあたりから始まります。卒論に扱う作品やテーマは、好きなものを選んだほうが良いなと感じました。読むのが辛くなったり行き詰ったりしても、好きな作品ならがんばれるからです。

メ切が近くなると辛いものもありましたが、卒論を執筆している間はとても充実した時間を過ごすことができました。今まで勉強してきた色々な「点」の知識が、執筆している間に「線」となり、だんだん形を成していく過程がとても楽しかったです。また、年末年始を返上してみんなと研究室でカタカタ作成したり、先生や先輩方からお菓子やピザをいただいたのはとてもいい思い出になりました。書いていくなかで一番難しいなと感じたのは、その作品を知らない人に向けてわかりやすく伝えることです。客観的に文章を見直しながら、わかりづらいところは説明を加えるように気を付けました。テーマを人物描写に焦点を当てたこともあり、執筆後は前より人の心がわかるようになったような気がします(気のせいかもしれません)。いずれにせよ、大学院に進まれる方を除いては人生で自分の好きに文章を書くことは貴重な経験だと思うので、これから執筆する後輩たちは満足のいくものにしていただけたらと思います。最後に、卒業論文執筆に際してお世話になった方々に感謝の意を表します。ありがとうございました。(学部4年 菅美咲)

学会旅行記 学会後の別府旅行について

博士後期課程に所属している石田雄樹です。私は去る 2013 年 10 月 26 日に別府大学で開催された日本フランス語フランス文学会で発表を行いました。学会終了後に先生方と行なった別府観光について一文を物したいと思います。

別府といえば温泉で有名です。寡聞にして私は詳しく知らなかったのですが、別府には「地獄」なるものが存在し、この地獄を巡る「地獄巡り」というものが観光の定番というのです。この地獄が何かといえはゆる温泉に相違ならないのですが、しかし温度が 80 度を越していたり、あるいは岩の影響か吹き出るお湯が奇妙な色に染まっていたりと、人間が入浴することは到底不可能な代物です。地獄巡りとはつまり色とりどりの温泉や、あるいは間欠泉の如きものを見物するものなのです。なかにはワニがひしめいていたり、飲む温泉や煙を浴びて健康になれる温泉があったり、あるいは奇妙ないでたちのご老人がタバコの煙を温泉に吹きかけ、それまで不可知だった温泉の気流を明らかにしたりと、地獄巡りは実にバラエティに富んでいる愉快なものなのです。

ただこれら多種多様な地獄が実はそれぞれ個人経営であり、それぞれの地獄が協定を結び、「地獄組合」なるものが組織されていると聞き及んだときの私の驚きは一様ではありませんでした。地獄もまた世知辛いものであると気持ちを新たにしました。



◀ 文字通り飲む温泉
「わーい、あちっ！」
▼ 間欠泉 硫黄臭が…



◀ 血の池地獄(?)

また私たちの観光を案内してくれたタクシーの運転手が仰るに、別府の温泉はすばらしいものであり、たとえばマンションでも各部屋に温泉が供給されているということです。驚嘆すべきはパチンコ店にも温泉施設が完備されており、パチンコを嗜んだあとは湯治も楽しめるのであれば、いくらなんでも別府の温泉の奥深さに言葉も出ないといったところです。残念なことは私がパチンコの趣味がないということです。やんぬるかな。

この地獄にはおみやげコーナーも当然完備されています。最も興味を引かれた品は、お湯をかけると裸体が浮かび上がるという妙艶な和服姿の女性が描かれたシートでしたが、阿部宏先生が「こんなものを買うようでは墮落である」と毅然と言い放ったので、私は購入する勇気を挫かれてしまいました。買ってあげばよかったと現在後悔しているところです。(博士後期課程学生 石田雄樹)

▼ 2013 年度 忘年会のワンシーン



編集後記

昨年に引き続き『フランス文学研究室 NEWS』の編集を担当させて頂きました、佐藤でございます。今回も、個性溢れる記事が多く、読者の皆様も、お茶の間のテレビそっちのけでお読みになられたことでしょう。オープンキャンパスや新入生オリエンテーションで配布されることを見越し、前回に比べ学生寄りの内容にさせて頂きました。

近況報告をさせて頂きますと、つい先日、同級生 4 人・先輩 2 人・後輩 1 人を誘い、ゲーム大会を開催しました。研究室にお菓子とジュースを持ちこみ、ジェンガや UNO、小さなホワイトボードを用いた大喜利などに興じる終始笑いの絶えない会で、メンバーの仲の良さを再確認する場となりました。

さて、季節は廻り早くも春が訪れます。出会いと、別れの季節です。私にとっては、留学など、諸々の理由で大学に残っていた 4 人の同級生（1 人は進学してくれます）、そして 8 人の後輩との別れの時です。彼・彼女たちと机を並べ、難解な訳読に四苦八苦したあの授業、皆のやる気が凄まじく、圧倒されたあの読書会、酔った勢いで要らぬことまで話してしまったあの飲み会…。共に過ごした日常の、薄く淡い記憶の断片が、最近になって精彩を取り戻し、脳の内壁に絵画のごとく飾られています。

あまり詩的な文章は、性に合いませんし、後々恥ずかしい思いをしたくないので、そろそろ筆を置きますが、より多くの卒業生そして新入生が本紙を読んでくだされば、望外の喜びと存じます。次号もまた、お楽しみに！（修士 1 年 佐藤亮太）

フランス文学研究室ホームページ

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/French/index.html>

現在、上記ホームページのリニューアルを行っています。完成は 4 月下旬を予定しておりますので、その折には是非アクセスしてくださいね！

「フランス文学研究室 NEWS」に関する、ご意見・ご要望は以下のところまでお願い致します。

TEL/FAX : 022-795-5973

Email : hiver2homme7@gmail.com